

## アイデアコンペの中から提案 (その2)

第9号(平成26年1月15日)

### ・作品番号7 (タイトル「人間性回帰の丘～自然に癒されて～」)

広島城エリアを19世紀以前のゾーン、平和公園エリアを20世紀のゾーン、これらをつなぐ中央公園エリアを21世紀のゾーンと捉えている。ここに平和の丘を作り、原爆ドーム・平和公園を望み、一方で広島城を見渡せる。平和の丘は城南通りの上に橋上化した高台を作り、平和公園と広島城を連続した自然公園とし、自然を体感しながら散歩できる安らぎの空間としている。

平和の丘の下には文化施設・スポーツ施設・遊びの施設等を収め、子供たちが安心して学び、遊べる総合文化施設としている。

人の心が癒され穏やかな精神状態を作り出す空間「人間性回帰の丘」が、この地に最もふさわしいという強い思いが込められている。



ゾーニング



平和の丘からのビスタ

### \*提案者：浅野政則氏 (自営業) のコメント\*

まちづくりひろしまは世界に誇れる広島のイメージを創る上で大変重要な取り組みと感じています。世界の大都市には必ずといって良いほど都心に自然を満喫できる公園が存在します。

人は自然に癒されてリフレッシュし、さまざまな創造力が生まれてくるものと考えております。経済の大都市でもある『ニューヨークのセントラルパーク』、『イギリス ロンドンハイドパーク』、『フランス パリ コンコルド広場』など、また、日本にも『東京の皇居外苑』などがあります。商業的な施設も人々が集える空間ではありますが、世代を問わず永い年月を考えると都心の自然空間は人々にとって心を癒し平和を感じる場所になると信じております。

第10号(平成26年3月15日)

### ・作品番号67「みんなのにな」

公園は行政のものではなく、みんなで共に作り上げていく庭である。単なる憩いや安らぎの場ではなく、公園で何かをしたいと思ったら、実現可能な公園にしたい。

そのために市民に愛着をもって使ってもらえるパークマネジメントを提案している。

コーディネーターとして中央公園を管理運営する独立行政法人を立ち上げ、公園づくり協議会を中心として市民参加型のプログラムを実践していく。その協議会は、公園内の施設団体、既存のサークル団体やNPO法人や大学等の公園を利用する団体、学識経験者、地域住民で構成される。

その他にファミリーエリアをサポートする体制を整える。



公園のマネジメントに市民を巻き込み、大きなイベントによる一時的な賑わいではない、日常的に公園に慣れ親しんでもらうためのソフトの提案である。

**\*提案者：兼松渉氏（フリーランス）のコメント\***

中央公園を新たな「まちの居場所」とするために、市民に深く愛された球場の跡地があるここをどのように市民の方を含め、さまざまな方に使いこなしていただくかを考えました。市民の方が主体的に「使いこなす」ために行政、民間という枠組みを越えた新しい関係を長い期間を掛けながらつくり上げていく必要があると考えています。

まちづくりひろしまなど市民がまちづくりに主体的に関っている活動は新しい関係をつくるうえでの第一歩のように感じます。一方でこのような活動を持続させるためには、今の世代にとどまることなく、次の世代にどのように引き継いでいくかが重要な課題になると思います。

<b>公園づくり協議会</b>	公園づくり・運営管理に関して、今後どのように進めていくかを話し合う場。また部会で決まったことの報告と承認を聞く場。参加するのは、公園内に施設をもっている団体、プログラムを行っている団体の代表者、学識経験者、地域住民である。
<b>コーディネート部会</b>	プログラム実施団体の選定や調整や公園内の案内、コーディネーターが独自に行うプログラムの準備と実施などの業務を行う。
<b>ファミリーエリア部会</b>	ファミリーエリアに関する情報の整理や新たな子どもの登録などを取りまとめる。また、遊具等の貸し出しや新たに必要な遊具など購入などを行う。サポーターやジュニアサポーターの選定、登録や教育を行う。
<b>サポーター</b>	地域住民の中で中央公園の手伝いを行いたいと申し出た人たちのこと。特にファミリーエリアにおける子どもたちの見守り役として手伝う方5人で編成するチームを「五人組」という。
<b>ジュニアサポーター</b>	中学生から高校生までで公園内業務を手伝いたいと申し込んだ人たちのこと。以前、ファミリーエリアで遊んでいた子どもがジュニアサポーターとして子どもたちの面倒をみるような役割が行われることを期待している。

第11号(平成26年5月15日)

**・作品番号28「安らぎと活気のある空間」**

公園にはいろいろな用途があるが、都心の一等地にあるこのエリアは昼の顔と夜の顔を持ち合わせているのがよい。昼はいわゆる公園、夜は集客が見込める公園を提案する。

まず木々を植えて森を作り、その中に小道を作りベンチを置いて、人々が遊んだり寛いだりできる公園としての機能を持たせる。夜は一転して、屋台が軒を連ね、毎晩もしくは毎週末が縁日のような空間が生まれる。

屋台は、ある場所はアジア各国の料理、ある場所は南米各国の料理といった、中央公園に行けば食文化の地球一周ができるようにして人を呼び込む。

公園としての安らぎと都心の活気を昼と夜に分けて、両方を獲得しようという斬新な提案である。

**\*提案者：吉岡佑樹氏（当時広島国際大学4年生）\***

連絡がとれないためコメントは省略



昼のイメージ



夜のイメージ

第12号(平成26年7月15日)

**・作品番号64「Sustainable Urban Metabolism」**

平和公園が世界平和のシンボルの静の公園に対して、中央公園は現在の広島生活や市民のシンボルとなる動の公園と位置づけ、未来に向けて成長し続けるための新しい基盤と人々の意識を生むデザインとして、次の3つを提案している。

- ・自然と向き合うために公園内を横断する道路を地中化して緑の一体化を図る。また、公園内に川から水を引き入れ、人工の入り江を設けて川との関係を強める。
- ・既存の施設を見直し、新たな中枢機能として音楽を加え、



公園内の道路を地中化

教育・芸術・音楽の3つの軸を持った文化エリアを生む。  
市民球場跡地はマーケットスペースを設け、新しい人の集まりや流れを作る。

・公園内を横断する橋を架け、その橋上に市内を望む展望スポットを設ける。平和公園と基町高層アパートと広島城公園内を横断する橋を結び、広島の歴史と空間をつなぐことにより、公園に新たな動きを与える。



公園内を横断する橋

**\*提案者：杉田 宗氏（杉田三郎建築設計事務所）のコメント\***

長年に渡り様々な建築に関わり、広島の発展や変化を見守ってきた弊社にとって、本コンペへの参加は、今後広島が直面する様々な問題を認識する重要な機会となりました。今後、広島の街も社会の劇的な変化に対応した更新が必要です。21世紀の都市に必要なのは、消費エネルギーやメンテナンスに限定した持続可能性ではなく、街の様々な活動の持続性であり、それをデザインできる人材が都市の形成に大きく影響すると考えています。都市の復興の姿を世界に伝える広島で、我々も次の時代に向けた新しいまちづくりに関われないかと、前に向かっていきます。

第13号(平成26年9月15日)

**・作品番号1 丹下健三氏の広島平和都市建設構想案**

1949年に中島地区の「広島平和記念公園」の設計競技に当選し、ほぼその通り実現することになった。さらに1950年、丹下氏は基町地区まで拡張した「広島平和公園計画」を策定している。

1949年に制定された「広島平和記念都市建設法」の精神を具現化しようとしたものと言える。

南北の公園をつなぐ機能として児童センター本部を設置し、周辺に児童図書館や児童科学美術館等を緑の中に分散配置している。

その北側にはフットボール場や陸上競技場等の運動施設を配置。広島城域内には美術館、博物館等の文化施設を配置している。

平和記念公園から原爆ドームを貫く1本の軸線を北まで延長し、主要施設を秩序付けている。

基町地区案は児童図書館のみ実現したが、「広島平和記念都市建設計画」に盛り込まれることはなかった。



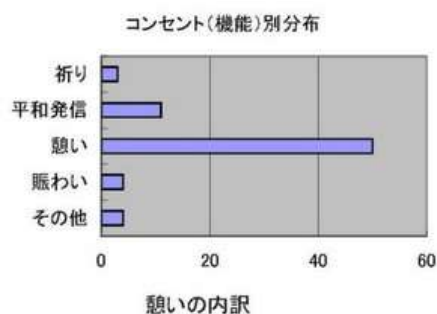
**\*コメント\***

丹下氏は南北の公園を一体化したコミュニティセンターとしてとらえ、広島の都市のコアにしたいと考えていた。公共性の高い、誰でも利用できる施設群を緑のオープンスペースの中に配置し、過去の慰霊と未来の平和の創造を夢見ていたのではないかと。

2011年に行った広島市中央公園アイデアコンペで提案された72作品をアイデアコンペ事務局において分析したものを紹介する。

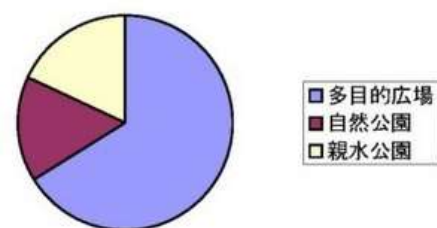
・広島における平和をどう具現化しているか？

提案作品の主テーマを「祈り」、「歴史の継承・平和発信」、「憩い・安らぎ」、「町の発展・賑わい」、「その他」のコンセプトに分類して集計した結果が右のグラフである。



圧倒的に「憩い・安らぎ」の場の提案(50作品)が多かった。その内訳として緑やグランド等のオープンスペースでイベント等の多目的に使える広場(66%)が一番多かった。

祈りの場は平和記念公園に譲って、中央公園は未来志向の明るく、活動的な公園が好まれたと言える。憩い、安らぎ、楽しむことが平和の証であり、被爆者への鎮魂の気持ちを秘めて、日常の平和を甘受する場にしたいということであろう。



「歴史の継承・平和発信」の場の提案は11作品。広島を過去・現在・未来をリンクさせて未来に引き継いでいこうと訴えている。歴史的価値のあるものの保存活用、歴史・平和の情報を集積できる場、原爆ドームや広島城や町並みを展望できる丘、世界平和を実現するための国際機関の誘致等、貴重な提案が多かった。

「町の発展・賑わい」の場の提案は4作品。メッセ機能・観光資源・文化施設・スタジアム・シンボルタワー等、集客力のある施設を集中的に配置する提案である。

・このエリアをどう捉えるか？

- ① 隣接する平和記念公園との関係をどうするかがキーポイントとなるが、機能的な役割を分担しながらも空間的な一体感を求める提案が多い。その手法として平和記念公園から原爆ドームを貫く丹下軸線を明確に意識した提案が25作品。その他に両者を分断している電車通りを立体交差(アンダーパスを含む)でつなぐ案や川沿いのリバーウォークを軸にして一体化を図る案もあった。
- ② 旧市民球場跡地は球場の取り壊しが決まった時期だったので、一部保存活用をしたり、球場の面影を何らかの形で残す提案が多かった。また、平和記念公園と中央公園をつなぐ要の地であり、繁華街からのゲートを意識した提案も多かった。
- ③ 太田川(本川)に接しているなので、船着場や水辺デッキ等のリバーフロントの提案が多く、川・池・水との触れ合いを意識した提案が16作品あり。
- ④ その他、エリア内の公共施設の扱い、周辺の基町団地や広島城との関係、道路で分断された公園内の一体化策等、貴重な提案があった。

2011年に行った広島市中央公園アイデアコンペの結果が公表され、後日、特別審査員と入賞者が集まって公開討論会が催された。その中で発言された特別審査員の見解を紹介して、アイデアコンペからの提案シリーズを終了とする。

・平岡敬氏（審査委員長）

・広島平和記念都市建設法（以下、平和都市法）の目指す都市像を念頭に置いて中央公園を考える。ただ憩うだけではなく、生きる喜びが実感できる場、平和を実現するための活動の場にして、平和で飯が食えるようにするのがよい。



・中央公園の将来の姿は、これしかないというのではなく、変わってもよい。市民の意識が町を作っていくので、市民の意識を高めていくのに今回の試みが一助になればよい。

・石丸紀興氏（審査員）

・計画を提案することは、自分が歴史に参加したという思いを醸成することが今回のコンペで分かった。中央公園と平和公園のつなぎ方、水辺の使い方、軸線の扱い方等、多くのストックを得た。



・広島の平和復興の物語から言えば、平和都市法の果たした役割は大きく、物語を完結させないで、これからも作っていく必要がある。その物語を都市づくりに結実していき、今生きている人達はその歴史に関わっていく必要がある。

・ナスリーン・アジミ氏（審査員）

・広島は「祈りの場」、「平和発信の地」、「賑わいの場」等、すべての要素がそろっている。小さなことを変えるだけでも、中央公園と平和公園をつなぎ、一体感を更に高めることができる。中央公園も球場跡地もこれから姿を変えることにより、全体的なまとまりを作ることができる。



・現在そして未来の世代のために平和のメッセージを伝える建築の力を過小評価してはいけない。広島は戦後、賢明な建築家とその価値がわかる政治家のお陰で都市の発展を遂げてきた。広島は世界の象徴的存在であることを市民が一番わかっていると思うので、そのために参加してもらいたい。

・高東博視氏（審査員）

・平和都市法（第1条）では「恒久平和実現の理想の象徴として、広島市を平和記念都市として建設する」とあるが、平和記念都市とはどういうものか一切条文にない。その実現に向けて広島市民が具体的に構想し、完成させて行かなければならない。



・このため広島市民は常日頃、理想の象徴であることを自覚し、不断の努力を積み重ねていかねばならない。そうして将来にわたり平和都市法を活かしていくことがヒロシマの使命であろう。

・前岡智之氏（事務局）

・広島は被爆という唯一無二の体験をし、市民の総意により平和都市法を成立させ、復興にとりかかった。広島は日本中、世界中から復興のための応援を受け、その恩を返す時期が来ている。誰に返すか、どうやって返すかが課題である。



・祈り、平和発信、賑わい等のコンセプトがあるが、それらのデザインは変化してもよい。ただ忘れてはならないのは、多くの人から応援をいただき、平和を表現する町を広島は持てたこと。それ故に、これから平和の町を作る人や平和を表現する人には、是非広島に来てもらって、平和を表現する町を知ってもらう仕組みが中央公園の将来の姿にあるべきではないか。